

清水紀子様

看護小規模多機能型居宅介護事業所
看護師 管理者 室谷利江

医療者としてではなく「ひとりの人として」向き合ってほしい

看護師として長く仕事をしてきましたが、医療事故の当事者ご家族の話を聞いたことはほとんどありませんでした。

当事者であるご家族の気持ち、心境の変わっていく様子、家族から見た医療者の姿などは、お互いが向き合って話をしなければ決してわからないことと思います。

事故の直後は悲しみ、悔しさ、怒りなどで混乱しているであろうことは想像できますが、その深さや本当の苦しみは全て理解できるようなものではありません。

お話の中には、私に想像もつかなかった感情もありました。

病院での話し合いの席に出向くときの気持ちを清水さんは「怖かった」とおっしゃいましたが、私には想像すらできないことでした。

逆に、私たちは凶弾されるのではないかと、当事者のご家族は悲しみと怒りなどを医療者にぶつけてくるのではないかと思い、医療者側が「怖い」と感じるのではないかと考えていました。

清水さんが話し合いの席で会った看護師たちを、「この人たちは怖がっている」と感じたとおっしゃいましたが、私には、その看護師たちの気持ちは想像できたのです。

一連の話を通して、清水さんが一番伝えたかったことは何であろうかと、考えながらお話を聞かせていただきました。

起きた事実を誠実に伝えてほしい、その時にどう考えてその行為が行われたのか知りたい、二度と同じことを起こさないでほしいということはもちろんのことですが、もっとも求められていたのは「医療者としてではなく、ひとりの人として向き合ってほしい」ということではなかったかと思いました。

ひとりの人として向き合えていれば、お父様の畑が雑草で荒れていくのを見る清水さんの気持ちや一緒に草取りをしてほしいという思いを、「体罰」と受け取る発想は起こらないでしょう。

県の医療審議会は、第三者の公正な判断機関のように見えて、実は、保険会社との賠償金を決めることなのです。それなのに、医療側が、ここへ依頼することが正しいと考えることも、人として向き合っていないからではないでしょうか。

医療者の医師も看護師も、患者の命を救うということは学生時代に教育されますが、命の大切さや重みを理解するには十分ではありません。

医療事故が起こったとき、ご家族が事実を知ることが困難な現実、一方で医療者側が簡単に非を認めず謝罪しないという行動。それが、どうしておこるのか医療者も考える必要があると思います。

保身も一因と思いますが、医療の不確実性を理由にして開き直っているようにも感じます。

医療者には、一定の割合でリスクはあるものだとか、ヒューマンエラーはゼロにはできないという諦めや慣れあいはないだろうかと考えさせられました。

そんな考えが強まると、たまたま私は運悪くミスをしたが、誰でも起こすことだと思うようになり、自分を省みなくなるのではないかと怖くなります。

起きてしまった医療事故に対して、医療者側がご家族と真摯に向き合い対話をするには、ご家族が悲しみと怒りの中から立ち上がるために必要不可欠なことです。医療者が人としてどうあるべきかを深く考え、医療の質の向上や倫理観を育てるためにも避けてはならないことであると思いました。

お父様のこと、ご自身の感じたままの感情の動きなどをつぶさにお話されることは、とてもエネルギーを使うことではなかったかと思います。ありがとうございました。